

令和 6 年 4 月 12 日現在

機関番号：87207

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K16637

研究課題名（和文）問題飲酒者に対するオンライン版飲酒日記の効果検証と新たなプログラムの開発

研究課題名（英文）Verification of the effect of online version of drinking diary for problem drinkers and development of new program

研究代表者

角南 隆史（SUNAMI, TAKASHI）

地方独立行政法人佐賀県医療センター好生館（総合臨床研究所）・総合臨床研究所・医師・医療系職員

研究者番号：20796924

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1)職域で行ったSNAPPY-DOCプログラム(日々の飲酒量をオンラインで記録し、フィードバックが得られるプログラム)の効果検証研究を論文化し英文誌に掲載した。2)総合病院でSNAPPY-DOCプログラムの利便性調査を行い、このプログラムを一般公開した。 <https://snappydoc.udb.jp/> 3)オンラインで問題飲酒について振り返りを行うワークブックを作成し、一般公開した。一般公開後も、様々な職域でプログラムを実施し、効果検証や利便性の確認を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、SNAPPY-DOCプログラムの効果検証および利便性の調査、そしてオンラインで問題飲酒について振り返りを行うワークブックを作成した。その後、大手飲料メーカーなどとともに、さまざまな職域の多量飲酒者に対してSNAPPY-DOCプログラムを利用していただき、効果検証や利便性の検証を行っている。また、SNAPPYプログラムの一つである、SNAPPY-PANDAプログラム(自らの飲酒量が簡単に調べられるプログラム)は、2024年2月に厚生労働省が作成した「健康に配慮した飲酒に関するガイドライン」の一般市民向け広報資料の中に掲載されている。

研究成果の概要（英文）：In this study, 1) Conducted a study of the effectiveness of the SNAPPY-DOC program (a program that records daily alcohol consumption online and provides feedback) at workplaces, and published an article in an English-language journal. 2) Conducted a convenience study of the SNAPPY-DOC program at a general hospital and made this program available to the public. <https://snappydoc.udb.jp/> 3) An online workbook for reflecting on problem drinking was created and made available to the public.

After the public release, the program was implemented at various workplaces to verify the effectiveness and convenience of the program.

研究分野：減酒支援

キーワード：減酒支援 アルコール依存症 多量飲酒 オンライン プリーフ・インターベンション

1. 研究開始当初の背景

厚生労働科学研究の調査によると、日本にはアルコール依存症者が 107 万人、その予備軍の危険な飲酒者が 1036 万人いるが、その中で専門的な治療を受けている者は 4 万人程度しかない(尾崎 2015)。これは介入の場所(精神科専門医療機関)や方法(外来よりも入院が主)が限られており、重症のアルコール依存症者しか介入に結びついていないことが原因と考えられる。

また全世界において、アルコールが原因で年間 300 万人が死亡しており(WHO 2018)、アルコール問題は世界的に大きな課題である。諸外国では「簡易介入」(飲酒量を減らすように促す、短時間の対面式の面接)が開発され、その効果は確認されている(Kaner 2009)。しかし簡易介入は地理的・時間的な制約やコストの問題から、普及は進んでいない(O'Donnell 2014)。この問題を解決するために、オンラインでの治療的介入が欧米を中心に開発され、RCT で効果検証がされてきた(Riper 2014)。

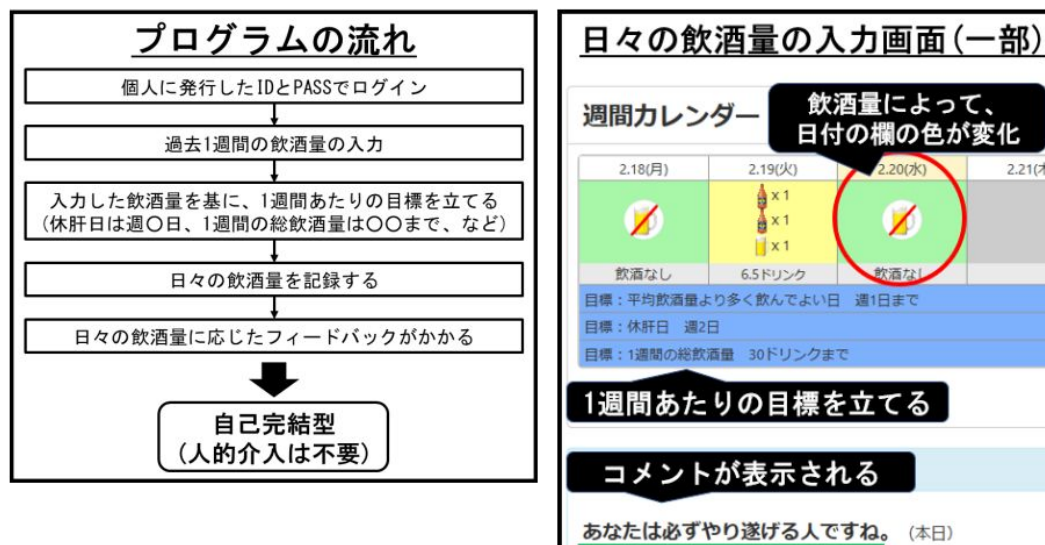
一方、本邦では簡易介入(対面式)に関する研究は少なく、オンラインでの介入に関しては啓発サイトがある程度で、治療的介入はほとんど行われていない。しかし前記の厚生労働科学研究の調査で、1036 万人の危険な飲酒者のうち、63.0%が過去 1 年間に何らかの理由で医療機関を受診し、76.8%が健康診断を受けていることが判明している(尾崎 2015)。また研究者らが総合病院の外来患者に行った調査では、飲酒量の多い者ほど「飲酒量を減らしたい」と思っているが、「減らす自信がない」という結果を得ている(角南 2020)。よってアルコール問題について、より簡便に知る、相談できるツールが必要であると考えられた。そこで研究者らは、アルコール問題を啓発するウェブサイトを数々作成してきた。(https://www.udb.jp/snappy_test/)

これまでに作成したアルコール問題を啓発するウェブサイト		
SNAPPY-CAT	2014年	オンラインでAUDITを実施し、点数に応じてアドバイスを提供
SNAPPY-PANDA	2015年	オンラインで飲酒量を計算し、そこからアルコール分解時刻を算出し提供
SNAPPY-BEAR	2017年	アルコールの心身への影響についてYOUTUBE®形式の動画で学ぶ
SNAPPY-LION	2018年	LINE®を用いて、チャットボット形式でアルコールに関するクイズを行う
SNAPPY-DEER	2019年	「断酒して良かったこと」を断酒会員100名に聞き、その結果を解説を交えて紹介

そして地域住民、職域、保健所など様々なフィールドで講演会や研修会を行ってきた中で、専門医療機関には現れないような軽度の依存症者や多量飲酒者への介入を広げるためには、単なる「啓発」だけではなく「継続して治療的介入」を行うオンラインのプログラムが必要であると考えようになった。そこで AMED 研究で SNAPPY-DOC プログラム(下記参照)を作成した。

SNAPPY-DOC プログラムについて

SNAPPY-DOC は、Sensible And Natural Alcoholism Prevention Program for You, Diary On Computer の略で、AMED 委託研究開発「アルコール依存症予防のための簡易介入プログラム開発と効果評価に関する研究(平成 29～31 年度、研究開発代表者：杠岳文)」の分担研究「WEB 上の簡易介入プログラムの開発とその効果検証(分担研究者：上野雄文、研究協力者：角南隆史)」において作成した。上野の助言のもと、プログラム全体の設計は角南が行い、コーディング(プログラムの作成)は「有限会社アイ・エス・イー」の渡邊暁氏に委託した。



このような背景から、アルコール問題への治療的介入に関する研究を促進することが急務であり、社会的に求められている。本研究で解決すべき課題は、専門医療機関ではなく職域や総合病院でアルコール問題に介入を行う SNAPPY-DOC プログラムの効果検証を行い、対面ではなくオンラインによって飲酒者の行動変容が起こるかどうかを検証することである。

2. 研究の目的

研究 1) 職域で SNAPPY-DOC プログラムの効果検証

効果検証(RCT)を職域で行う。そして利用後に感想、新たなプログラム開発のためのニーズの聞き取りを行う。

研究 2) 総合病院で SNAPPY-DOC プログラムの利便性調査

SNAPPY-DOC プログラムを、専門治療を行っていない総合病院で患者に利用してもらい、利用後に感想、ニーズの聞き取りを行う。

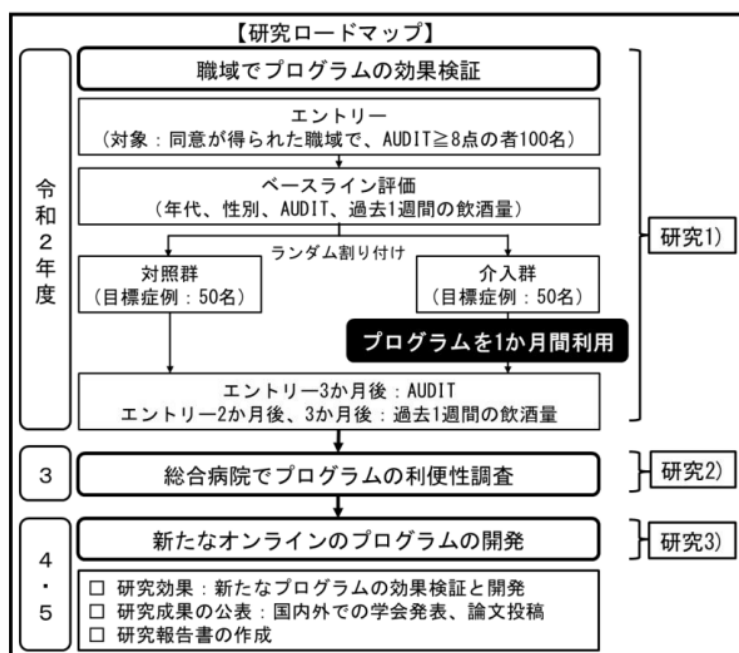
研究 3) 新たなオンラインのプログラムの開発

SNAPPY-DOC プログラムを補完する、新たなオンラインのプログラムを開発する。

3. 研究の方法

研究 1) 職域で SNAPPY-DOC プログラムの効果検証(令和 2 年度)

デザイン：多施設共同による RCT
目標症例数：研究協力の得られた職域に勤務する成人で、AUDIT (The Alcohol Use Disorders Identification Test) が 8 点以上の者 100 名。
症例数設定の根拠：先行研究のエフェクトサイズや実行可能性を考慮し設定した。
方法：ランダム化を行い、対照群と介入群に割り付け実施する。介入内容や観察期間、アウトカムは図に示すとおりである。そして利用後に感想、新たなプログラム開発のためのニーズの聞き取りを行う。なお研究期間終了後は、対照群もプログラムが利用できるようにする。
対照群と比較して、介入群では飲酒量が低減し AUDIT スコアの改善が予測される。



研究 2) 総合病院で SNAPPY-DOC プログラムの利便性調査(令和 3 年度)

目標症例数：総合病院に通院する成人の外来患者 10 名。

症例数設定の根拠：実行可能性を考慮し、設定した。

介入内容：これまでアルコール問題がありながら介入を受けていなかった外来患者にプログラムを利用してもらい、そして、患者から利用後の感想、新たなプログラム開発のためのニーズの聞き取りを行う。

研究 1)、2)を通じて職域、総合病院から聞き取りを行うことで、研究 3)で新たなオンラインのプログラムの開発を行うための、具体的なニーズを抽出することができる。

研究 3) 新たなオンラインのプログラムの開発(令和 4、5 年度)

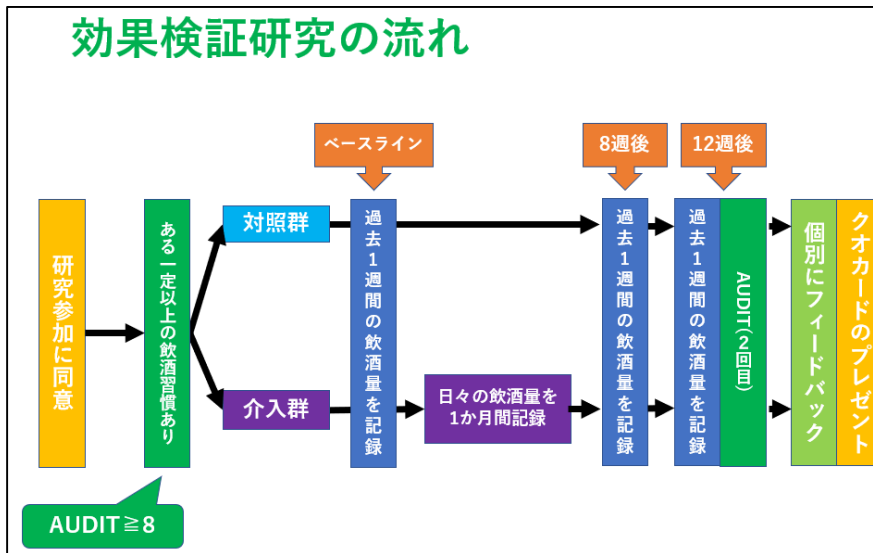
研究方法：諸外国での先行研究と、研究 1)、2)で得られた知見を統合し、介入強度をさらに深めた、新たなオンラインのプログラムを開発する。具体的には、認知行動療法や動機づけ面接法などの技法を織り交ぜた、オンラインでアルコール問題に介入するプログラムを想定している。そしてこの新たなプログラムを、広く一般に公開する。その後もプログラムへのアクセス記録や、利用者に感想を聞くことで、利便性や有効性の確認を行う。

新たなオンラインのプログラムを一般公開することで、これまで治療的介入が行われてこなかった層への介入が可能になる。結果として、大多数のアルコール依存症者や危険な飲酒者が自らのアルコール問題に向き合い、飲酒量を減らせると期待できる。

4. 研究成果

研究 1) 職域で SNAPPY-DOC プログラムの効果検証(令和 2 年度)

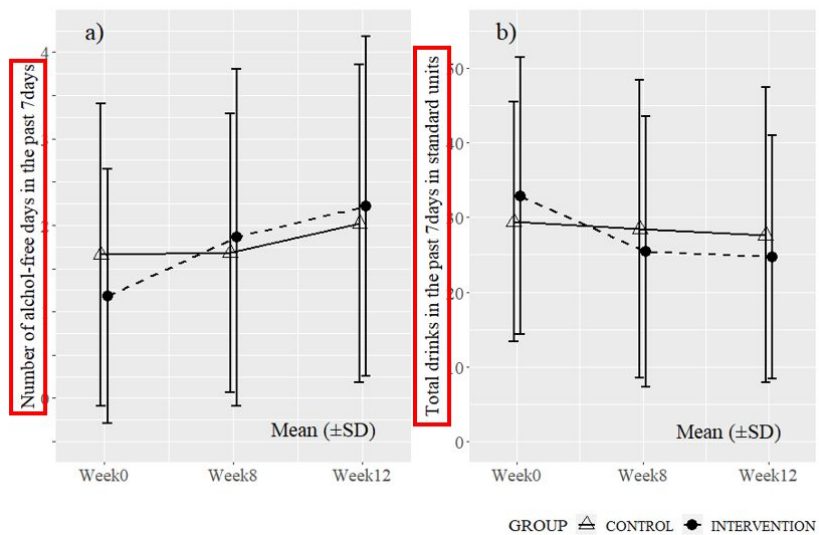
6 カ所の職域で AUDIT が 8 点以上の多量飲酒者 100 名(対照群：50 名、介入群：50 名)に対して、SNAPPY-DOC プログラムの効果検証研究を行った。



SNAPPY-DOC プログラムを利用することにより、12 週の介入期間後、介入群では対照群に比べ、飲酒量（過去 1 週間の休肝日日数、過去 1 週間の総飲酒量→詳細は、右図の通り）および AUDIT が統計的に有意に改善した。そして研究に参加した 100 名全員を、12 週間追跡することができた。

飲酒量の経時的な変化

two-way repeated measures ANOVA



本研究の結果から、職域の多量飲酒者に対する SNAPPY-DOC プログラムによる介入は、飲酒量を減らす効果があることが示唆された。本研究は、アルコール健康教育、研究の説明、同意の取得が対面で行われ、フォローアップ調査が未記入であった者への連絡も各職域の担当者が直接声掛けを行ったため、完全にオンラインで実施されたわけではない。しかし直接の声掛けが必要だったのは全参加者 100 名のうち 11 名のみで、介入群では、研究者からの週 1 回のリマインドメールのみで 50 名全員が介入(SNAPPY-DOC に 4 週間、日々の飲酒量を記録する)を完了した。職域において短時間の健康教育に続く多量飲酒者のための SNAPPY-DOC プログラムによる介入は、産業保健スタッフの最小限の関与で、高い継続率と労働者の飲酒量を減らす効果があることが示された。

本研究結果は、オープンアクセスジャーナルである Journal of Occupational Health(Impact factor:2.708)にアクセプトされ、2022 年 1 月に出版された。
Sunami T, So R, Ishii H, et al. A randomized controlled trial of the web-based drinking diary program for problem drinking in multi workplace settings. J Occup Health. 2022;64(1):e12312. doi:10.1002/1348-9585.12312

研究 2) 総合病院で SNAPPY-DOC プログラムの利便性調査(令和 3 年度)

2021 年 9 月に当館の倫理審査委員会の承認を得て、利便性調査を行った。具体的には当館精神科にアルコール依存症や多量飲酒で通院中の患者 10 名に SNAPPY-DOC プログラムを短期間利用してもらい、利便性や改善点を調査した。

結果、入力手順や操作手順などの利便性については特段の問題はなかった。改善点については、色調から文字が見づらいこと、フィードバックの文言がどこに表記されているのか分かりづらいことなどが挙げられた。挙げられた改善点を修正し、SNAPPY-DOC プログラムを改良し、ホームページ上に一般公開した。 <https://snappydoc.udb.jp/>

研究 3) 新たなオンラインのプログラムの開発(令和 4, 5 年度)

研究 2) で様々な意見を聞く中で、日々の飲酒量を記録してフィードバックを受けるだけでなく、飲酒習慣に関して振り返りを行うようなプログラムがあると、より飲酒習慣の行動変容につながるのではないかと考えられた。

そこで、久里浜医療センター、肥前精神医療センター、岡山県精神科医療センターなど国内を代表する依存症専門医療機関の紙媒体のワークブックや、NIAAA(National Institute on Alcohol Abuse and Alcoholism)のオンライン上で公開されているワークブック(PDF 形式)などを参考に、SNAPPY-DOC プログラムの中で飲酒習慣に関して振り返りを行えるようなオンライン上のワークブックを作成した。

ワークブックの具体的な内容は、普段の飲酒量がどの程度多いかどうかを振り返る、お酒の良い面・悪い面について考える、多量飲酒と関係のある病気や、お酒を飲みたくなる場所と時間について考える、お酒を減らすための対処法や工夫したことについて考える、お酒を減らすことで感じた、身体、こころ、生活面での変化について考える、である。

その後 2023 年度は、大手飲料メーカーなどとともに、さまざまな職域の多量飲酒者に対して SNAPPY-DOC プログラムを利用いただき、効果検証や利便性の検証を行った。
https://www.kirinholdings.com/jp/newsroom/release/2023/0208_01.html

そして SNAPPY プログラムの一つである、SNAPPY-PANDA プログラム(自らの飲酒量が簡単に調べられるプログラム)は、2024 年 2 月に厚生労働省が作成した「健康に配慮した飲酒に関するガイドライン」に基づいた、一般市民向け広報資料の中に掲載されている。
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_38541.html

<引用文献>

・尾崎米厚．日本成人における飲酒関連問題の頻度と潜在患者．平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金，総括・分担研究報告書．2015

・Global status report on alcohol and health 2018
<https://www.who.int/publications/i/item/9789241565639>

・Kaner EF, Dickinson HO, Beyer F, et al. The effectiveness of brief alcohol interventions in primary care settings: a systematic review. Drug Alcohol Rev. 2009;28(3):301-323. doi:10.1111/j.1465-3362.2009.00071.x

・O'Donnell A, Wallace P, Kaner E. From efficacy to effectiveness and beyond: what next for brief interventions in primary care?. Front Psychiatry. 2014;5:113. Published 2014 Aug 28. doi:10.3389/fpsy.2014.00113

・Riper H, Blankers M, Hadiwijaya H, et al. Effectiveness of guided and unguided low-intensity internet interventions for adult alcohol misuse: a meta-analysis. PLoS One. 2014;9(6):e99912. Published 2014 Jun 17. doi:10.1371/journal.pone.0099912

・角南 隆史，宋 龍平，石井 博修，福田 貴博，石丸 正吾，杠 岳文．総合病院外来患者の飲酒量と減酒のニーズ、および減酒支援を受けた経験(実態調査報告)
総合病院精神医学 32(2) 157-166 2020

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 角南隆史	4. 巻 297
2. 論文標題 【リハビリテーション医療の現場で知っておきたい精神科関連の実践的知識】日常臨床に役立つアルコール健康障害への介入方法	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 MEDICAL REHABILITATION	6. 最初と最後の頁 48-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 角南 隆史, 杠 岳文, 齋藤 利和, 宮田 久嗣, 西谷 陽子, 露木 寛之, 樋口 進	4. 巻 58
2. 論文標題 アルコール依存症と運転免許 依存症の重症度・治療目標と運転免許制度の変遷	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本アルコール・薬物医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 9-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 角南 隆史, 杠 岳文, 齋藤 利和, 宮田 久嗣, 西谷 陽子, 露木 寛之, 樋口 進	4. 巻 58
2. 論文標題 アルコール依存症と運転免許 依存症の重症度・治療目標と運転免許制度に関するアンケート調査	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本アルコール・薬物医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 82-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 角南隆史	4. 巻 2023
2. 論文標題 SNAPPYプログラムのご紹介 多量飲酒・アルコール依存症に対するWEB上の介入ツール	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 好生	6. 最初と最後の頁 37-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 角南隆史	4. 巻 6
2. 論文標題 【依存症治療の現在】総合病院で減酒外来を始めてみたら	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 精神医療	6. 最初と最後の頁 54-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 角南 隆史, 宋 龍平	4. 巻 24
2. 論文標題 減酒指導における飲酒に関する目標の立て方	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本アルコール関連問題学会雑誌	6. 最初と最後の頁 119-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 角南隆史	4. 巻 34
2. 論文標題 ないないづくしの総合病院でも始められる『アルコール・チーム医療』せん妄対策から始まる, 総合病院内での「アルコール・チーム医療」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 総合病院精神医学	6. 最初と最後の頁 S-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 角南隆史	4. 巻 37
2. 論文標題 【精神科臨床ライブ】(第13章)精神科救急事態 「夜に眠れず, 落ち着かず, 壁に文字が書いてありました」アルコール離脱せん妄/けいれん	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 308-311
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sunami Takashi, So Ryuhei, Ishii Hironobu, Sadashima Eiji, Ueno Takefumi, Yuzuriha Takefumi, Monji Akira	4. 巻 64
2. 論文標題 A randomized controlled trial of the web - based drinking diary program for problem drinking in multi workplace settings	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Occupational Health	6. 最初と最後の頁 e12312
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/1348-9585.12312	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 角南隆史、杠岳文	4. 巻 別冊
2. 論文標題 アルコール使用障害への早期介入プログラム	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 医学のあゆみ	6. 最初と最後の頁 137-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sunami Takashi, Kawai Maiko, Sakurai Junko, Shirasaka Tomohiro, Tezuka Yukio, Nagamine Hiroko, Maesato Hitoshi, Yumoto Yosuke, Yoshimoto Hisashi, Adachi Yoshiko, Yuzuriha Takefumi	4. 巻 63
2. 論文標題 Introduction of a support program for reducing alcohol consumption that can be applied immediately in the workplace	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 SANGYO EISEIGAKU ZASSHI	6. 最初と最後の頁 324 ~ 328
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1539/sangyoeisei.2020-044-W	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 角南隆史	4. 巻 39
2. 論文標題 佐賀県医療センター好生館における減酒外来	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Pharma Medica	6. 最初と最後の頁 106-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 角南隆史、杠岳文	4．巻 34
2．論文標題 アルコール関連問題が社会に与えるインパクト	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ストレス科学	6．最初と最後の頁 171-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 角南隆史、杠岳文	4．巻 274
2．論文標題 アルコール使用障害への早期介入プログラム	5．発行年 2020年
3．雑誌名 医学のあゆみ	6．最初と最後の頁 137-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 角南隆史	4．巻 32
2．論文標題 佐賀県医療センター好生館におけるアルコール健康障害への取り組みと、その効果について	5．発行年 2020年
3．雑誌名 総合病院精神医学	6．最初と最後の頁 254-261
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 角南隆史、宋龍平、石井博修、福田貴博、石丸正吾、杠岳文	4．巻 32
2．論文標題 総合病院外来患者の飲酒量と減酒のニーズ、および減酒支援を受けた経験(実態調査報告)	5．発行年 2020年
3．雑誌名 総合病院精神医学	6．最初と最後の頁 157-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1．発表者名 角南隆史
2．発表標題 アルコール依存症・有害使用の治療格差を埋める決定打は総合病院での診療である せん妄対策から始める,総合病院でのアルコール健康障害対策
3．学会等名 第36回日本総合病院精神医学会総会
4．発表年 2023年

1．発表者名 角南隆史
2．発表標題 アルコール使用障害患者を日常診療で診るために:非専門の医療スタッフでも使える短時間の簡易アプローチ SNAPPYプログラム アルコール使用障害に対するWEB上の介入ツール
3．学会等名 第119回日本精神神経学会学術総会
4．発表年 2023年

1．発表者名 角南隆史
2．発表標題 ICTを用いた飲酒問題の1次予防・2次予防
3．学会等名 2023年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会
4．発表年 2023年

1．発表者名 角南隆史
2．発表標題 連携しなくても何とかなるアルコール問題対策
3．学会等名 第35回九州アルコール関連問題学会
4．発表年 2024年

1．発表者名 角南隆史
2．発表標題 アルコール問題の評価、診断、治療理論
3．学会等名 第35回九州アルコール関連問題学会
4．発表年 2024年

1．発表者名 角南隆史
2．発表標題 ブリーフ・インターベンションの基礎とこれまでのエビデンス
3．学会等名 ブリーフ・インターベンション & HAPPYプログラム研修
4．発表年 2022年

1．発表者名 角南隆史
2．発表標題 オンライン版飲酒日記のご紹介SNAPPY-DOC プログラム
3．学会等名 第344回アルコール関連問題予防研究会
4．発表年 2022年

1．発表者名 角南隆史
2．発表標題 アルコール依存症の医療連携
3．学会等名 2022年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会
4．発表年 2022年

1．発表者名 角南隆史
2．発表標題 ないないづくしの総合病院でも始められる『アルコール・チーム医療』
3．学会等名 第35回 日本総合病院精神医学会総会
4．発表年 2022年

1．発表者名 角南隆史
2．発表標題 アルコール性肝障害とハームリダクションの可能性
3．学会等名 第42回アルコール医学生物学研究会学術集会
4．発表年 2022年

1．発表者名 角南隆史
2．発表標題 「がまん」から「よろこび」に変わる、総合病院精神科での減酒治療
3．学会等名 2021年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会
4．発表年 2021年

1．発表者名 角南隆史
2．発表標題 医療機関、職域、地域でICT機器を用いたアルコール健康障害に対する介入
3．学会等名 2021年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会
4．発表年 2021年

1．発表者名 角南隆史
2．発表標題 総合病院内から展開する様々な依存症治療 これからの依存症治療 若手からの提言
3．学会等名 第34回日本総合病院精神医学会総会
4．発表年 2021年

1．発表者名 角南隆史
2．発表標題 ウェブ上のツール(SNAPPYプログラム)を用いた総合病院精神科での「減酒外来」
3．学会等名 第34回日本総合病院精神医学会総会
4．発表年 2021年

1．発表者名 角南隆史
2．発表標題 総合病院精神科におけるアルコール健康障害への取り組みと、「減酒外来」について
3．学会等名 第117回日本精神神経学会学術総会
4．発表年 2021年

1．発表者名 角南隆史、宋龍平、石井博修、貞嶋栄司、上野雄文、杠岳文、門司晃
2．発表標題 問題飲酒者に対するオンライン版飲酒日記の有効性の評価（パイロットRCT）
3．学会等名 第116回日本精神神経学会学術総会
4．発表年 2020年

1．発表者名 角南隆史、花房喜代治、渡邊浩子、石井博修
2．発表標題 当院におけるアルコール健康障害への取り組みと、「減酒外来」について
3．学会等名 第33回日本総合病院精神医学会総会
4．発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1．著者名 角南隆史、杠岳文	4．発行年 2023年
2．出版社 中山書店	5．総ページ数 598
3．書名 物質使用症又は嗜癮行動症群性別不合（担当：分担執筆，範囲：物質使用症の治療 心理社会的治療）	

1．著者名 成瀬暢也	4．発行年 2023年
2．出版社 新興医学出版社	5．総ページ数 280
3．書名 内科医・かかりつけ医のためのアルコール使用障害治療ハンドブック	

1．著者名 松本俊彦、佐久間寛之、蒲生裕司	4．発行年 2021年
2．出版社 文光堂	5．総ページ数 446
3．書名 やってみたくなるアディクション診療・支援ガイド	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------